

【数学】

実践事例：中学校2年生 / 実施機関：京都市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまづくポイント

問題文を理解し、条件や定理などを使いながら論理的に答えを導くことが難しい。

- ① 連立方程式等、手順が複雑な計算
- ② 一次関数等、複数の学習内容をつなぎ合わせて考える問題
- ③ 証明等の文章問題

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD (学習障害) ADHD (注意欠陥/多動性障害)
 その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること 聞くこと 話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
 コミュニケーションをすること 気持ちを表現すること
 落ち着くこと・集中すること 概念(時間、大きさ等)を理解すること
 学習(計算、推論等)すること その他

- ・集中することが苦手で、授業中、様々な刺激に対して反応してしまう。
- ・苦手意識があることに対して取り組む意欲が低い。
- ・視覚情報を捉え、直感的に答えたり、記憶していることを答えたりすることはできる。
- ・学習習慣が確立されておらず、学習したことが定着しにくい。
- ・体験を通して得た知識は獲得しやすい。

2. 教科における学習上のつまづきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

- a. 6月に生徒対象のアンケート調査(資料1)を行う。
- b. 日々の授業や小テスト、学習会等において、その都度実態把握を行う。
- c. 週1回の通級による指導の時間において、実態把握を重ねる。

(2) 実態把握の方法(実施者・方法)

- a. 得意な学び方や学びやすさを把握するため、生徒を対象にアンケートを実施し、得意な入力方法、発信方法、学習形態等を把握する。
- b. 数学担当教員や通級による指導の担当教員が主となり、下記のとおり実施する。
 - ・授業の記録(ビデオ等)による実態把握と分析。
 - ・ノートやテストによる間違い分析。
 - ・授業時の様子や日常会話からの実態把握と分析。
- c. 通級による指導において、対象生徒からの聞き取り等、詳細な情報収集を行う。

(資料 1)

	内容	○
A 耳、目と耳から入力	①先生の言葉での説明を聞く	
	②図や表や写真や実物を見ながら、先生の言葉での説明を聞く	
	③生徒の説明を聞く	
B 目から入力	①教科書や黒板に書いてある説明を読む	
	②動画による説明を見る	
	③先生や生徒が実際にやっているところを見る	
	④図や表で示されたものを見る	
	⑤図などを描きながら説明されたものを見る	
C 音声で発信、耳で聴取	①声に出して読む	
	②リズムに合わせて言う、歌う、読む(語呂合せなども含む)	
D 課題後、確認	①まずやってみて、説明を聞く(試す、動く、しゃべる、読む、書く)	
	②練習問題を解いた後に説明を聞く	
E グループ学習で	①班やグループで学び合う	
	②一対一で生徒から教えてもらう	
	③他の生徒に説明をする	
	④他の生徒に教える	
F 多様な学び方	①何度も問題を解く	
	②一対一で先生から教えてもらう	
	③好きなことや知っていることと関連づける	

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

①連立方程式

- ・係数を揃えることはできるが、解を求めるまでに至らない。

②一次関数

- ・座標や傾き等が提示された問題から、式を求めることができない。
- ・式やグラフ等が絡み合った問題を解くことができない。

③証明

- ・角度を求めることができた図形でも、向きが変わると同じ考え方で答えを導くことができない。
- ・自分がどのような方法で考えたのかを文章で記述することができない。

(2) つまづいている背景・原因

①連立方程式

- ・短期記憶の弱さに加え、学習習慣が身に付いていないため、既習事項の方程式の解き方が定着していない。
- ・ワーキングメモリの弱さから、手順が増え複雑化すると、解き方の理解が曖昧になる。
- ・解が合わなかった際、間違ったところに戻って修正できない。

②一次関数

- ・短期記憶の弱さに加え、学習習慣が身に付いていないため、一次関数の傾きと切片が、式やグラフのどの部分に現れるのか等の基本的な知識が定着していない。
- ・記憶力の弱さから、式やグラフと複数の事象の絡みを頭の中で整理しながら考えることが難しい。

③証明

- ・何から考えたらいいか、あるいは何をを利用して考えたらいいかの見通しが立たない。
- ・視知覚や視覚記憶の弱さがあり、角度を求めることができた図形でも、向きが変わると同じ考え方で答えを導くことができない。
- ・ワーキングメモリの弱さから、自分の考えを頭の中で整理できない。
- ・文章で書くこと自体が難しい。
- ・仮定と結論の違いが理解できておらず、証明の途中で結論を使ってしまう。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

- ・授業のスタート時、全生徒のやる気と集中力を高めるために、2分間のウォーミングアップタイムを行った。容易な課題を提示し、皆が必ず取り組む時間を設けることで、学習に向かう姿勢への切り替えが素早くなった。

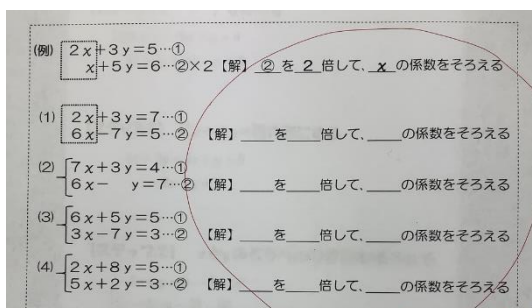
(課題例)

0~48までの数字を見て、小さい順に数字に
チェックを入れて消していくもの

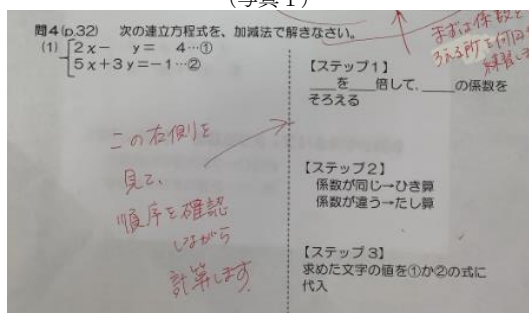
42	22	13	17	15	14	47
33	36	45	34	30	7	4
43	37	9	12	41	44	5
28	3	20	40	19	46	26
24	2	23	0	27	8	39
35	25	16	32	38	31	6
1	11	29	18	10	21	48

①連立方程式

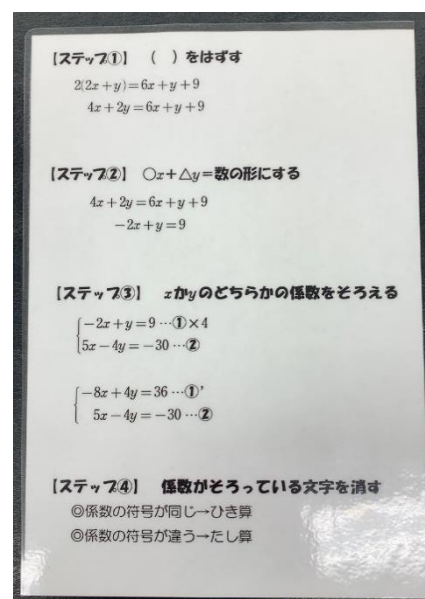
- ・手順を細かく分けることで、一つ一つの手順を確実にできるようにした。まずは、(写真1)のプリントを使って、係数を揃えることを何度も練習してから計算問題に入った。計算問題では、問題の横に手順を示したプリント(写真2)を使い、手掛かりになるようにした。括弧のある問題になると手順が増えて複雑になるため、手順を確認しながら問題を解いていけるよう、希望する生徒に、(写真3)のカードを渡し、手元に置いておくようにした。



(写真1)



(写真2)



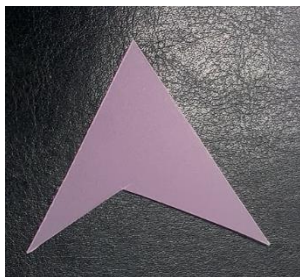
(写真3)

②一次関数

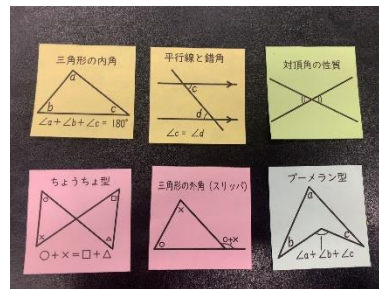
- ・一次関数の式や傾きと切片を定着させるために、授業の導入時にフラッシュカードを使って、一次関数の式から傾きと切片を答えたり、傾きと切片から一次関数の式を答えたりする活動をペアで行うようにした。
- ・問題文の中の傾きと切片等、考える上でヒントになる部分に、下線を引いて強調するようにした。

④ 証明

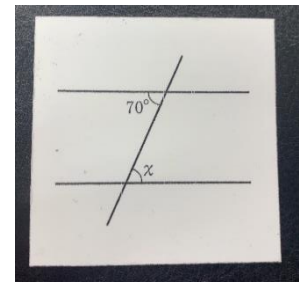
- ・これならできそう、やってみたいと思えるように、手元で操作しながら考えられるカードや、ヒントカード等を活用した。図形の角度を求める場面では、プラスチックのカード(写真4/5 cm×5 cm)を配り、様々な向きになっている問題に対して、自分でカードを回転させたり動かしたりしながら、同じ形を探すことができるようにした。また、角度を求めたり、証明したりする際に、根拠として使用できるよう、ヒントカード(写真5/5 cm×5 cm)を配った。証明については、具体的な数値が無く、 $\angle A = \angle B$ のように、抽象的な表記となるため、(写真6)のように、具体的な値を使って理解を促すようにした。



(写真4)



(写真5)



(写真6)

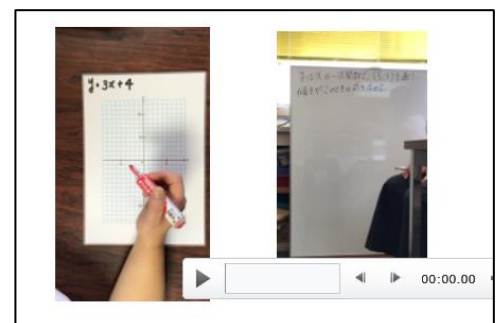
- ・証明に使える定理を、言葉・図に記号を入れたもの・式で表したものの三つの視点でリストアップし(写真7)、プリントを見ながら、それぞれの問題において、どれが使えるかを選ぶようにした。

No	図形の性質	図	記号・式
6	●二等辺三角形の性質 2つの底角は 等しい		$AB = AC$ $\angle B = \angle C$
7	●二等辺三角形の頂角の二等分線 頂角の二等分線は 底辺に垂直に二等分 する		$\angle BAD = \angle CAD$ かつ $AD \perp BC$ $BD = CD$
8	●2角が等しい三角形 2つの角が等しい三角形は 二等辺三角形		$\angle B = \angle C$ かつ $AB = AC$
9	●平行四辺形の性質 ①平行四辺形の 2組の向かい合う辺は、それぞれ等しい		$AD = BC$ $AB = DC$ $AD = BC$ $AB = DC$

(写真7)

(ii) 個別指導について(取り出し指導、通級による指導との連携など)

- ・できる見通しをもって数学の授業に臨めるよう、動画コンテンツを作成し、通級による指導において、活用した。内容は、グラフの描き方、角度の求め方等、基礎に絞った。また、集中が持続しやすいよう、時間は5分以内とし、必要最低限の音声と映像による説明に留めた。また、3(i)③で示した「証明」の授業で使用するカードを、通級による指導において事前に使用しておくことで、自信をもって学習に向かうことができるようにした。



(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

【知識及び技能】

◆成果

動画コンテンツを活用したことにより、グラフの描き方や角度の求め方等、基礎的な問題については解くことができるようになった。

- ・連立方程式においては、 x か y どちらかの係数が揃っているものについては、加減法で最後まで解を導くことができるようになった。係数が揃っていないものについては、式を何倍かして係数を揃えることができた。括弧がついた問題に関しても、括弧を外すまではできるようになった。
- ・一次関数の式の形や傾き、切片について、基本的なことが理解できた。また、傾きと切片から一次関数のグラフを描くことができた。

◆課題

間違いやすいところは気をつけたり、見直ししたり等の習慣を身に付けていくための指導が必要である。

- ・連立方程式を解く手順は理解しているが、括弧を外したり、係数を揃えたりする際に数字をかけ忘れたり、正負の計算でミスをしたりするなど、解が合わないことが多かった。

【思考力・判断力・表現力等】

◆成果

思考の手助けとなるカードや手順書を提示し、目で見ても手元で操作したり、確認したりしながら学習に向かうようにしたことで理解しやすくなった。

◆課題

頭の中ではなく、目で見ても確認できる教材を更に開発することや、難易度によって、配布するカードの数を増減し、選択しやすくすることが大切である。

- ・説明の手助けとして根拠カードを配布したが、その枚数が多く、扱いきれない場面があった。
- ・傾きと切片から式を求めたり、傾きと座標から式を求めたりする問題については、同じ種類の問題を扱う時はできるが、いくつかのパターンが一つのプリントに混ざって出ているものについては、どのやり方を使えばよいのかが分からなかった。
- ・例えば、「傾き3」「変化の割合3」「2点(1, 3)(3, 9)を通る」、これらは全て同じことを表現しているが、情報量が多く、それらを頭の中で整理することができなかった。

【学びに向かう力・人間性等】

◆成果

授業の始めに行う内容をルーティーン化することで、授業への取り掛かりがスムーズになった。また、通級における指導において、ヒントカード等を使った学習を先行的に言い、使い方を知っておくことで、数学の授業ではできる見通しを持ち、意欲的に取り組むことができた。

◆課題

教科の授業において、学習内容や方法の見通しをもっておくことができるよう、今後も通級による指導と連携して取り組んでいく。

【理科】

実践事例：中学校3年生 / 実施機関：京都市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

- ・目に見えないもの、見えにくいもののイメージ化
- ・用語の理解と活用
- ・実技における手順や知識の理解

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 情緒障害 LD（学習障害） ■ADHD（注意欠陥/多動性障害）
- その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること ■聞くこと ■話すこと 読むこと 書くこと 動くこと
- コミュニケーションをすること ■気持ちを表現すること
- 落ち着くこと・集中すること 概念（時間、大きさ等）を理解すること
- 学習（計算、推論等）すること その他

- ・単純な会話のやりとりは行えるが、自分の考えを説明することや、話し合い活動は苦手である。
- ・単純な指示は理解し、行動できるが、指示の内容が長い時や、一斉指導の場面では、理解が不十分になりがちである。
- ・自分の感情や、出来事を話すことは苦手である。
- ・グループワークでの意見をまとめて書くことは難しい。
- ・植物の構造や、電流が流れる回路をつくるもの等、図を通して判断する学習は理解しやすい。
- ・表のデータをグラフにする場合、方法が理解できれば自力で学習することができる。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

- 日々の授業や小テストの達成状況等において、その都度実態把握をする。
- 校内関係者によるケース会議を1学期に1回行う。
- 週1回の通級による指導にて、実態把握を重ねる。

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

- 理科担当教員や通級による指導担当教員が主となり、下記のとおり実施する。
 - ・授業の記録（ビデオ等）による実態把握と分析。
 - ・ノート、テストによる間違い分析。
 - ・授業時の様子や日常会話からの実態把握と分析。
- 指導主事と校内研究部が協議し、更なる実態把握につなげる。

- c. 通級による指導において、対象生徒からの聞き取り等、詳細な情報収集を行う。

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

①目に見えないもの、見るできないもののイメージ化

理科の授業で学習する内容はそのほとんどが身近なものではあるが、内容によっては目に見えないもの、見るできないものがある。そのため、計算自体はできるが、その数字や単位が示していることが長さなのか重さなのか等を理解することが難しい。また、理科に対する興味をもちにくい。

②用語の理解と活用

【元素記号】

物質名と元素記号を連動して覚える必要がある。また、記号はアルファベットの大文字と小文字を使い分けたり、原子番号も合わせて覚えたり等、いくつもの要素を複合的に理解し、覚える必要があるため、そのとき覚えていても、すぐに忘れてしまう。

【鉱物】

中学1年生の火山の分野で学習する鉱物は、写真と教科書や問題集で出てくるイラストと実物とでは当然違いがある。多くの場合はイラストから特徴を見つけ出し、その鉱物の名前や、有色鉱物か無色鉱物か、火成岩においても火山岩の中の流紋岩から玄武岩、深成岩の中の花崗岩から斑れい岩と複数あるが、どの岩石にどの鉱物が多く含まれるかなど、多くの情報をつなげて理解し、覚えることが難しい。

【生態系】

生態系の中の食物連鎖において、中学校の教科書で語句として学習するのは、有機物を作り出す“生産者”と、有機物を消費する“消費者”、有機物を無機物に分解する“分解者”の大きく三つがある。

しかし、教科書の図をはじめ、現実の自然界では多くの生物がおり、特に消費者は更に細かく分かれている。(高校では草食動物を一次消費者、肉食動物を二次消費者などがあることを学習する。)

「食べる食べられるの関係」を示す食物連鎖では、どの生物がどの生物を食べるかが分かりやすいパターンもあれば、判断が難しいパターンもある。また、鳥は魚のみを食べるわけではなく、種によっては動物プランクトンを食べるものもいる。このように食物連鎖は必ず1本の線のように関係性ができるのではなく、複雑な網目状で生物同士がつながっている(食物網)ことも学習する。この複雑な形を理解することが難しい。

【その他】

中学校の理科では学習していく中で様々な用語も理解しなければいけない。それは、実験器具から、器具の手順、実験の手順や注意すべきポイント、重要語句など多種多様なものがある。これらの用語を暗記しても、“それが何か”という説明ができない。語句を暗記しているだけであるためと考えられる。

③実技における手順や知識の理解

ガスバーナーの操作や顕微鏡の操作等の実技において、実際の操作はできるが、知識として記憶したり理解したりすることが難しい。

(2) つまづいている背景・原因

①目に見えないもの、見るできないもののイメージ化

目に見えるものを記憶することは得意だが、語彙の少なさ、ワーキングメモリの弱さ、イメージ力の弱さ等があるため、言葉から、内容をイメージすることが難しい。

②用語の理解と活用

語彙の少なさやワーキングメモリの弱さ、イメージ力の弱さ等があるため、用語（言葉）の記憶や意味の理解が難しい。さらに、大量の情報を頭の中で相互に関連づけることが難しい。

③実技における手順や知識の理解

語彙の少なさや記憶力の弱さ等から、用語を答えたり、手順を言葉で説明することが難しい。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

①目に見えないもの、見るできないもののイメージ化

雑学のような形で、様々な関連エピソードを取り入れた。例えば、「m（メートル）は、なぜ世界共通の単位なのか」「マイナスイオンは存在するか」等の、教科書に載っていない内容を話すことで興味をもてるようにし、記憶を思い起こしやすくした。

例)メートル法で考えると、地球1周は（ほぼぴったり）4万kmとなる。なぜか？

答え：そもそもメートル法とは地球1周を4万kmとなるように作られたものだから。普段利用している1mや1cmなどの長さは地球1周を基準としている。また、4という数字も半分、 $1/4$ など小さい数字でありながら、分割がしやすい数字として採用されたとも言われている。



②用語の理解と活用

【元素記号】

ゲーム感覚で周囲と協力しながら元素記号を覚えることができるよう、7並べのカードゲームを行った。中学で主に学習する元素記号や原子番号1（水素）～20（カルシウム）と原子番号26（鉄）、29（銅）、30（亜鉛）、47（銀）以外のカードは、ジョーカーとして取り組むようにした。

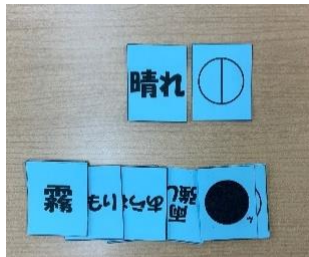


【鉱物】

写真とイラストや形の特徴などを一致させられるように神経衰弱方式で学習を実施した。写真とイラスト、写真と鉱物名、写真と形の特徴などを、楽しんで理解できるようにした。



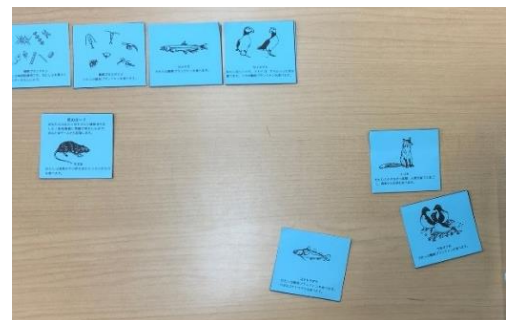
※【天気記号】も同様に取り組んだ。



【生態系】

生物名とイラストや何を食べるかが示されたカードを用意し、ポーカーのように揃えるゲームを実施した。

さらに、人間やネズミなどを外来生物とし、そのカードが手元に来るとゲームオーバーになるなど、外来生物によって生態系が壊れてしまうこともイメージしやすいものに工夫して実施した。

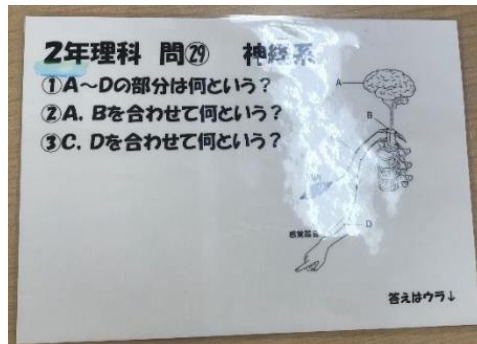
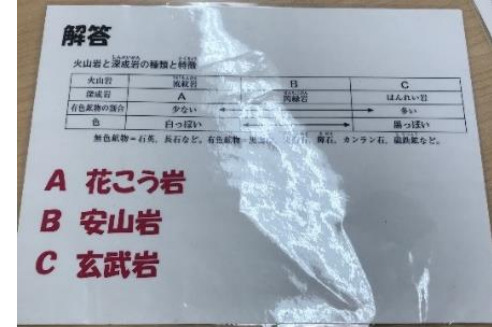
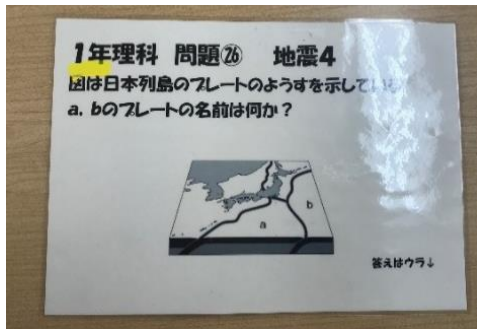


※【セキツイ動物の分類】【火成岩の分類】も同様に取り組んだ。



【その他】

一問一答形式の問題を作成し、定期テスト前の課題にした。また、写真のようにラミネートして、教室や廊下等に掲示することで、普段から目につきやすくした。重要な用語等を抜き出して解説する等、暗記しやすい形で提示した。



③実技における手順や知識の理解

実験では様々な器具を実験ごとに正しい順番で操作する、また結果を記録しグラフ化するなどの能力が求められる。定期テスト等でそれらの技能がどの程度理解できているかの確認は行うが、知識としての理解だけでなく、実際に操作を行う実技テストによる評価も行った。具体的には、次のとおりである。

実技テスト（抜粋）

□植物のスケッチ

正しい方法でスケッチができていますか。

□マッチでの火のつけ方

一定の時間火をつけていてもやけどをしないようにマッチを持っていますか。

□ガスバーナーの操作

火をつける前のチェック、火をつけるまで、火の色を赤から青にする、火を消す、火を消した後の操作までができていますか。

□顕微鏡の操作

正しい手順で操作し、ピントを合わせることができるか（最高倍率の400倍まで合わせられるか）。

□気体を集める置換法の組み方

上方置換法、下方置換法、水上置換法それぞれを協力して組み立て、実際に気体を集められるか。

□ろ過の際のろ液の注ぎ方

ろうとを用いてろ過した液体が飛び出さないように正しく操作が行えるか。

□データをグラフ化する

あらかじめ用意された表形式のデータを縦軸、横軸含め自ら条件を設定してグラフに表すことができるか。

□回路を組む

回路図を基に実際に回路を組むことができるか。回路を見てそれを回路図で示すことができるか。

□中和滴定

中和を行い、水溶液を中性にできるか。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

筆記したり考察したりする個々の学習場面では、教科書や授業プリントの図や表を指差しながら口頭説明を行った。例えば、「大きくなっている？小さくなっている？」と、選択肢を絞って質問してから、「大きくなっているということは？」と質問していく等、スモールステップで思考を促すようにした。

(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

◆知識及び技能

- ・ 元素記号やイオン式等の用語の知識を問う小テストでは、満点か、満点に近い点数を取るようになった。
- ・ 実技テストで毎回満点を取ることで、生徒自身が自分の強みに気付くことができた。

◆思考力・判断力・表現力等

- ・ 複数人で行う実技テストでは、周囲と相談して協力し合う姿が見られるようになった。
- ・ 実技テスト等、体験を通して学習すると、知識理解につながりやすくなった。
- ・ 一人で考察し、記述することは難しいが、具体的な例を挙げて説明すると、例に倣って自分なりに書けるようになった。

◆学びに向かう力・人間性等

- ・一人で考察し、記述することは難しいが、どうしたらよいか自分から質問する頻度が増えた。また、自分なりに書いた後、これでよいか確認を求めることが多くなった。
- ・テスト等で点数を取るようになり、自信をもてるようになった。また、次の学びへの意欲につながった。
- ・普段、表情は乏しいが、理科の授業ではよく笑顔が見られる。理科に興味をもち始めていることや、学習に対する意欲が感じられるようになった。

【外国語】

実践事例：中学校2年生 / 実施機関：京都市教育委員会

●教科における学習上の予想されるつまずくポイント

- ・英単語と音声不一致のため、英単語や英文を読んで内容を理解することができない。
- ・板書等を書き写すことに時間が掛かる。
- ・動詞や助詞等を組み合わせる等、文法を使って話したり、書いたりすることができない。

【指導例】

1. 対象とした児童生徒の実態

(1) 対象の障害

- 自閉症 □情緒障害 □LD（学習障害） □ADHD（注意欠陥/多動性障害）
- その他

(2) 子供の困難さ

- 見ること ■聞くこと ■話すこと ■読むこと ■書くこと □動くこと
- コミュニケーションをすること ■気持ちを表現すること
- 落ち着くこと・集中すること ■概念（時間、大きさ等）を理解すること
- 学習（計算、推論等）すること □その他

- ・短い単語等の容易な内容でも、覚えたことを次の日には忘れてしまう等、記憶力の弱さにより学習の定着や積上げが難しい。
- ・間違いを指摘されると受け入れることができず、ペアワークやグループワーク等の場面で他の生徒とトラブルになる。
- ・個別の声掛けを拒んだり、難しい方の問題を選択したり、プライドが高く自分に合った学習方法の選択ができない。
- ・語彙力が低く、記憶力も弱いため、文章を読んで、内容を理解することが難しい。
- ・特殊音節の獲得に時間がかかる等、音韻処理が苦手である。

2. 教科における学習上のつまずきを把握するための方策

(1) 実態把握の時期

- 6月に生徒対象のアンケート調査（資料1）を行う。
- 日々の授業や小テスト、学習会等において、その都度実態把握をする。
- 週1回の通級による指導において、実態把握を重ねる。

(2) 実態把握の方法（実施者・方法）

- 得意な学び方や学びやすさを把握するため、生徒対象にアンケートを実施し、得意な入力方法や発信方法、学習形態等を把握する。
- 英語担当教員や通級による指導担当教員が主となり、下記のとおり実施する。

- ・授業の記録（ビデオ等）による実態把握と分析。
 - ・ノートやテストによる間違い分析。
 - ・授業時の様子や日常会話からの実態把握と分析。
- c. 通級による指導において、アルファベットの音読みテストを実施する。

(資料 1)

	内容	○
A 耳、目と耳から入力	①先生の言葉での説明を聞く	
	②図や表や写真や実物を見ながら、先生の言葉での説明を聞く	
	③生徒の説明を聞く	
B 目から入力	①教科書や黒板に書いてある説明を読む	
	②動画による説明を見る	
	③先生や生徒が実際にやっているところを見る	
	④図や表で示されたものを見る	
	⑤図などを描きながら説明されたものを見る	
C 音声で覚悟、耳で確認	①声に出して読む	
	②リズムに合わせて言う、歌う、読む（語呂合せなども含む）	
D 課題後、確認	①まずやってみて、説明を聞く（試す、動く、しゃべる、読む、書く）	
	②練習問題を解いた後に説明を聞く	
E グループ学習で	①班やグループで学び合う	
	②一対一で生徒から教えてもらう	
	③他の生徒に説明をする	
	④他の生徒に教える	
F 多様な学び方	①何度も問題を解く	
	②一対一で先生から教えてもらう	
	③好きなことや知っていることと関連づける	

3. 指導内容

(1) 教科における学習上のつまずきの内容

- ・アルファベットの文字と音が一致するまでに時間が掛かるため、綴りを正確に覚えられない。
- ・bとd、fとt等、似ている形の文字が入った単語や、大文字と小文字を書き誤る。
- ・tennis、cat、dog、book等、馴染みのあるものの名前以外の単語は定着しづらい。

(2) つまずいている背景・原因

- ・音韻認識が弱く、文字と音が瞬時に結びつかない。
- ・記憶力の弱さから、多くの情報を頭の中で操作できない。
- ・日本語でも知らない単語が多い（語彙が少ない）。
- ・皆と同じであることにこだわりがあり、必要な支援を受け入れることが難しい。また、プライドが高いため、何種類かある問題プリントの中から、一番難しいものを選ぶ等、自分に合った教材を選択できない。
- ・分からないことを認められなかったり、伝えられなかったりするため、他の生徒と揉め

ることがある。

- ・分からないことを認められず、助けを求められない。
- ・記憶力の弱さに加え、学習習慣が身に付いていないことで、学習内容の定着が難しい。

(3) (1) に対し実施した指導方法、工夫した点

(i) 授業における全体指導、個への指導について

- ・指示は一つずつ出す等、情報量をできるだけ少なくした。
- ・板書は、枠や仕切り棒を使う等して、今すべき学習内容や大事なポイントが分かりやすいよう工夫した。
- ・見通しがもちやすいよう、本時の流れを明確にし、終わりを知らせた。
- ・大型テレビを使用する等、言葉での説明を視覚で補うことができるようにした。
- ・指導する上での対象生徒の目標については、書くことよりも容易な読むことから始めることにした。具体的には、「小学校レベルでの簡単なやりとりができるようになる」とし、授業においてはリスニングやスピーキング、ペアワーク等、座学だけでなく取組やすい活動を増やし、自信をつけるようにした。書き誤りについては、間違いやすい項目や文法等についてクラス全体に声掛けをしつつ、対象生徒については個別に教員が訂正・確認をした。

(ii) 個別指導について（取り出し指導、通級による指導との連携など）

- ・通級による指導において、アルファベットの音読みテストを行い、どの文字が読めないかを確認したところ、清音は獲得していたが、k⇔g、 f⇔v、 s⇔z 等、濁音については時間がかかる様子が見られた。
- ・読む際に、時間がかかる音について、フォニックスの手法（発音と文字のパターンを覚える手法）や、手を叩きながら発音するなど五感を使い、暗記するだけでなく記憶に結びつくような体験を通した指導により獲得を図った。
- ・BB カード（64 の英文を絵や文字で表したカードで、絵を手がかりにして、英文を覚えるようにするもの）等の教材を使って、楽しみながら文章を反復練習することで、センテンスを覚えられるようにした。

(4) (3) の効果・評価（児童生徒の様子や変容及び授業の評価）

◆知識及び技能

- ・読む際に時間が掛かっている音を獲得するために、フォニックスの手法や五感を使う等の体験を通した指導が有効であった。

◆思考力・判断力・表現力等

- ・事前に予習をしておくことで、見通しをもつことができ、参加意欲の高まりにつながっている。
- ・これまでできなかったペアワークでのやり取りは相手がジェスチャーでヒントを出すことでできる場面が増えてきている。

◆学びに向かう力・人間性等

- ・参加できる活動時は意欲的に取り組んでいる。
- ・導入問題、単語調べ等、意欲的に取り組む姿が見られている。